# 慈愛・慈悲の心映す共同募金、成熟した社会の証明

## 画家平山郁夫さんを訪ねて

インタビュー

**古都鎌倉に住み、七年前文化勲章を受章した画家平山郁夫さん（七十五歳）。多忙な毎日にもかかわらず、院展には毎年大作を出品するなど、創作意欲は少しの衰えも見せていない。同時に、「文化財赤十字運動」を提唱・実践し、内外から高い評価を受けている日本の代表的文化人を訪ねた。**

――先生は、画家であると同時に東京芸術大学の学長であり、ユネスコ親善大使を務めるほか、各種委員を歴任し、大変多忙な日々を送っています。どのように時間を使い分けているか、大変興味があります。

**平山** 集中力、持久力はあると思っています。気分の切り替えが早いのも強みでしょう。

芸大卒業後、助手、教授、学長など大学の仕事に携わってきましたが、本業は画家です。創作活動の業績を落としてはならず、院展にも欠かさず出品してきました。その間、時間をロスしないよう、五分の時間があれば、五分でできるデッサンを、三時間あれば三時間続けられる創作活動を、という訓練を積んできました。集中力が必要な百㍍走と、持久力が求められるマラソンの両方をこなしてきたと言うことでしょうか。

今も、年に少なくて四～五回、多ければ九回ぐらい外国に行きますが、帰国してもすぐに気持ちを切り替え、キャンバスの前に立つことが出来ます。

制作に、公務に、海外出張に。八面六臂（ぴ）の活躍と、正月も創作を忘れないストイックな精神は、奈良・薬師寺の玄奘三蔵院に描いた「大唐西域壁画」のモデル玄奘（げんじょう）三蔵の歩みをほうふつさせる。

「薬師寺 玄奘三蔵院」玄奘三蔵の頂骨が祀られている。

三蔵法師として知られる玄奘は七世紀前半の中国・唐代の僧。十三歳の時、年少で受験資格はないのに、特別の試験を受け僧に合格、二十九歳の時、インドへ求法（ぐほう）の旅に出る。画伯も十六歳で、当時「飛び級」制度のあった芸大の前身・東京美術学校に合格し、昭和三十四（一九五九）年、二十九歳の時、後の画家としての行き方を決定付ける「仏教伝来」を描いた。

――先生の作品の原点は被爆体験に根ざしているように思えます。特に「仏教伝来」は、被爆体験と無縁ではないと聞いています。

「アンコールワット遺跡」

**平山** 私は中学三年生の時、被爆しました。原爆が落ちたとき、遮へい物の陰に隠れ難を逃れましたが、隠れるのが一～二秒遅れたら、命はなかったでしょう。学校では二百人もの生徒や教師が即死し、放射能障害で同期生六十数人がなくなりました。私もその後、白血球が普通の人の半分以下に落ち込む後遺症に悩まされました。「しかし、私は生かされている。不運に死んだ仲間を鎮魂するには」という思いと、命がけで求法の旅を続けた玄奘の姿が重なり合い、「仏教伝来」の作品が生まれました。

インドへ旅立った玄奘は十六年後に帰国。その後、二十年かけて「大般若経」など経典千三百三十五巻を翻訳したという。

「仏教伝来」以降、仏教が画伯の作品の主要テーマとなり、昭和五十九年十一月、「大唐西域壁画」の制作に着手、平成十二（二〇〇〇）年の大みそかに最後の筆入れの儀式・入魂開眼を行う。七場面、十三面、縦二・二㍍、横約四十㍍の作品は、完成まで十六年の歳月を要した。

玄奘が歩いた道を追体験しようと、画伯もインドをはじめアフガニスタンや中央アジアなどシルクロードを百回以上、四十万㌔を旅する。

――シルクロードを歩いて目にしたのが、貴重な文化財や遺跡の散逸や破壊でしたね。そのことから「文化財赤十字運動」を提唱されました。

**平山** シルクロード以外にも、アジアにはカンボジアのアンコールワット遺跡、北朝鮮の高句麗古墳など素晴らしい文化財・遺跡がある。いずれも人類の共有財産です。国境や民族、宗教の垣根を越えて国際間で協力し保存修復、次世代に引き継ぐことは、私たちの責務でしょう。その事業を通じて異文化間の理解が深まれば、国際平和にもつながります。それが「文化財赤十字運動」の精神です。

そのためには、そこに住む人が、自らの歴史と文化に誇りを持ち、人間性を回復することが大切で、彼らの暮らしを守ることが重要になります。仕事を与え経済力をつける。学校を作り、歴史を教える。カンボジアでは、そうした支援が実り、復興と自立への道をたどりつつあります。

インドを目指し、経典を持ち帰るための玄奘の旅は、途中で出会う人を説得し、味方につける旅でもあった。時には、玄奘を襲った強盗団までも味方につけたという。

画伯が、国交がなく最悪の二国間関係に陥っている北朝鮮に、ここ十年で十回訪問。高句麗古墳を世界遺産に登録するためなどに尽力する姿は、何人をも味方につけようとする玄奘とダブる。両国間につながる、唯一とも思える細いパイプを通じて、対等に話し合い理解し合い、平和な友人関係を作り上げようという姿勢にほかならないからだ。

――宗教や民族の垣根を越えて文化財を守る「文化財赤十字運動」は、共同募金の精神とどこかでつながるような気がしますが…。

**平山** 弱者を助ける気持ちは、近代国家として、成熟した社会の姿でしょう。年金や保険制度だけでは十分ではない部分を、多くの人がわずかずつでも出し合って支えあう共同募金の精神。仏教でいう慈愛・慈悲の心です。一人が十円出しても全国では十億円になる。それを月五回やれば、五十億円に達します。

日本だけでなく、アジアやアフリカなど貧しい国々に対しても、そういう形で支援する。気持ちが豊かになりませんか。多くの人が、そういう気持ちを持ちたいものです。成熟社会なのですから。

聞き手 **大谷 義輝**
（神奈川新聞厚生文化事業団・専務理事）